明治の南海部郡郷土史より（下）

山本　保

（会員・佐伯市池船町）

教育

毛利氏の初世にあっては、教育もとよりあまねからず士は多少の文学ある者について、普通の読書を学び、民間にて寺院等に至り、書算を習うにすぎず、その力も極めて少数なりしが、高標公に至り大いに学事を奨励し四教堂（藩学）を興し、儒士を聘して藩士を教育す。文学始めて観るべし。

以後、儒者にして家塾を開き、孔孟の教えを伝え、あるいは、往来本を商工の子弟に教ゆるもの、ふえり（往来本とは教科書に編集された図書）。

明治五年高木喜一郎（中津の人）を聘し、共立社を立つ。これを西洋学の始めとす。

同年学制の発布あるや、佐伯小学校その他郡内各所に小学校を起こして、以て普通教育を一般人民に施すに至り、以後数字学則の改正あり、以て今日に至る（改正明治七・九・十五・二十九年）。

南海中学は明治十四年に創設し、同十八年廃す。初等中学科卒業生にわかれり。

南海部郡高等小学校は、明治二十年七月設置する所にして、当時にあって、職員五名、生徒六十名なりしが、現今、職員八名、生徒三百五十名に至れり。

その間、歴任せし校長左の如し。

校長心得　関　休三（郡書記兼務）

校　長　山中盛太郎　竹腰亀太郎　石田豊城

本校には、明治二十三年十一月、天皇・皇后陛下の御真影を拝戴し、同二十四年一月、勅語謄本一通を賜わりたり。

学者

松下佐右衛門（筑陰）は久留米の人なり。博学を以て聞こゆ。寛龍公（第八代藩主毛利高標）その名を聞こし召して、学校の師範となす。広瀬淡窓等かって同氏の家塾に来学せり。

中島増太（米華）は佐伯の人なり。若くして日田に学び、才学衆に越え、国侯命じて学校の教授となし、新た

に禄を賜い、父の上に斑し、別に人をして父の後たらしむ。人皆これを栄とす。

高妻廉平（芳洲）は佐伯の人なり。性正直かって侯命により、日出に学ぶ。学成りて帰り学校教授に任ぜらる。

明石大助は杵築の人なり。博学・能書・本藩の蔵書に富むを聞き、来りて明石氏に継ぎ、学館世話掛を努む。

秋月小助（橘門）は高鍋の人なり。儒学を日田及び筑前に修め、医を備前に学ぶ。また都下に遊ぶこと数年後郷に帰って医を業とす。国侯これを召して教授となす。

維新後、葛飾県知事等に歴任す。長子新太郎また、すこぶる才学に富み、参事院議官の職に当たれり。

矢野文雄（前小田県知事矢野程蔵の長子）は佐伯の人なり。博学にして見聞が広くして、文章に長ず。いま式部官たり（明治二二ー二八年の間に式部官）。

藤田茂吉は佐伯の人なり。籍を東京に移し、日本橋区よりえらばれて、衆議院議員となる（明治二二ー二五年総選挙当選）。

谷謹一郎は佐伯の人なり。大蔵大臣秘書官に至る。

その他、儒学に楠文蔚・関令三・松岡涛平・中島熊一郎、国学に橋佐古春鞆・同春樹・柴田守典等あり、佐伯藩の文学の隆盛をしのぶことができる。

兵　事

藩祖毛利高政砲術に長じ、ついに一流を開始し、朝鮮の役これを以て、しばしば奇功を奏せり。よりて歴代その遺法を伝え、一家臣中御流儀方なるものあるに至れりいまの野戦法の如し。

藩の兵法は甲州流を用いしが、明治の初年より英式に改め、もって大いにその面目を新たにせり。

剣法は三神流、本藩の流儀たるも、中世以降直心影流盛んに行われたり。

明治維新の際、邦内動乱、出兵の要あるを見るも、小藩にして士卒すくなし。地方の農民を募り、しきりに訓練を加えしかば、士農合わせて一千の精兵を出すに至れり。

篤行者

源右衛門は丹賀の人なり。実直常に仁を行う。村内かって疫あり。貧者に薬餌を給し、孤独はみずから行って看護す。ここにおいて国侯三人扶持をたまえりという。

サトは山部村惣吉の妻なり。よく、しゅうと・しゅうとめに仕う。かって火災に会う。危急の際、その子の焼死するおもかえりみずして、しゅうと・しゅうとめを助け出す。国侯米若干俵を与えて、これを賞せり。

三之丞は下野村の人にして、船頭町の商人金十郎の雇たり。常に主人を助けて貨殖す。しかるに、主家しばしば疫病あるいは火災に遭う。三之丞ますます勉めて、ついに主家を全うす。国侯金を賜うてこれを賞せり。

ヤツは下入津山岡産蔵の妻なり。多年しゅうと・しゅうとめに孝、夫に貞、よく婦道を尽すを以て、本県知事より賞せられたり。

新吉は明治村荘蔵四郎の子なり。幼より母の病をみ、多年孝養怠りなきを以て、本県知事より賞状を受領せり。

ヨネは直見村真田佐吉の妻なり。十余年その間、夫の看護に怠りなく、よく婦道を守るを以て、本県知事の賞状を得たり。

その外、たくさんの受賞者がいた。

社　寺

彦権現（宮ノ内）・大宮八幡宮（戸穴）・星宮大明神（下野）・今熊権現（上岡）・大内大明神（古市）・城八幡宮（堅田）・寺田権現（堅田）・一ノ宮大明神（切畑）・祇園宮（切畑）・二ノ宮大明神（上野）・白山権現（上野）・前高大明神（因尾）等これを佐伯十二社と称せり（五所明神社・若宮八幡社は別格でしょうか）。

由来最も古く、諸人の敬神する所なり。各縁起あり。

養賢寺（禅宗）・潮谷寺（浄土宗）・大日寺（真言宗）久成寺（日蓮宗）・善教寺（真宗）、これを五ケ寺と称し、郡中の巨刹たり。各村の寺院は、皆五ケ寺の末寺なりしが、現今は独立なり。

岡ノ谷招魂社は、西南の役に戦死せし士卒をまつれる所にして、陸軍大尉高田吉岳以下百四十余の墓碑あり。

明治十年の役、薩摩軍肥後に敗れ、豊後に入る。而して、わが郡に入りしは、実に同年の五月にして、四民負担してのがれ、かくる。

薩軍すなわち山内某の家を以て本営となし、兵を募り（随行する者七十余人）、糧を集む。ここにおいて官軍海陸より来り攻む（海ー浅間号・日進号、陸ー野津中佐）薩軍大いに恐れ、夜に乗じて逃げる。これより、この地は官軍の本拠地となり、平定に至る迄、日夜すこぶる雑

踏せり。

地　史

佐伯町及び付近の地は、いにしえは海なりしと伝え言う。

鶴岡村字白潟（今の海岸より一里）は、いにしえは漁村にして、今の八幡祠前は百渓、川は大船のつながれし所なりと。また、城山の東麓に松崎といえる所あり。けだし岬頭に松樹ありしを以て名づけしなり。

佐伯町字臼坪・高山益蔵の祖先は、アジ網を以て生業とせり。

注　解

明治時代の南海部郡長は左の通り。（以下県会議員）

初代　斉藤　利明（明治　十一年）　明治十一年
二代　菊村　　徳（明治二十一年）　渡辺　潤平
三代　関　　休三（明治二十二年）　青木作一郎
四代　玉置　本資（明治二十四年）　染矢　　譲
五代　狭間　重亜（明治二十九年）　東　　円作
六代　安田　源太（明治三十二年）
七代　渡辺　村男（明治三十七年）　明治十三年
八代　多羅間政輔（明治三十九年）　渡辺　潤平
九代　河越万三郎（明治四十三年）　月本　弥吉

大正時代の南海部郡長は左の通り。

十代　田島　七郎（大正　元年）　野々下節治
十一代　岩松　繁夫（大正　三年）　明治十五年
十二代　沖田　義信（大正　五年）　中島固一郎
十三代　熊谷頼太郎（大正　六年）　月本　弥吉
十四代　穂坂　重吉（大正　六年）　平山右文治
十五代　山田　民蔵（大正十二年）　野々下節治
十六代　加藤　安蔵（大正十三年）　大正十五年廃止

明治十一年、海部郡が南・北の両郡に分れて、南海部郡役所が佐伯村新道に開設された。

明治二十四年四月、第一回南海部郡会議員選挙が行われ、当選した議員は左の通り。

佐伯町　中島固一郎　明治十七年ごろの県会議員
鶴岡村　坂本惣五郎　清田　良作
八幡村　藤田　竜蔵　吉良　昌吉
西上浦村　田村儀左蔵
上堅田村　工藤佐太郎

下堅田・青山村　清田　良作
大入島村　高瀬　宗明
木立村　成迫伊勢吉
明治村　市野瀬寿平
切畑・上野村　吉良　昌吉
中野・因尾村　高橋　太作
東上浦村　遠城寺邦彦
東中浦村　河野　常吉
西中浦村　阿南　其二
上入津村　今泉　元逸
下入津村　平山右文治
蒲江村　山田和三郎
名護屋村　日置　泉
（以上十八名）

現在の県会議員
佐藤　佑一　木許　晃
矢野　竹雄　長田　助勝

明治十九年県会議員
今泉　元逸
月本　小策

◆経過報告

・五月二十一日　古文書解読講習会　佐伯図書館　二十名
・六月十八日　佐伯史談一四八号発送
・六月十九日　町並みと町づくりを考える県民の会　清田・三宅
・六月二十三日　佐伯独歩会総会　佐伯文化会館
・七月二日　研修部会　六名　佐伯市芸術祭について
・七月二十二日　新生活運動協議会　蒲江町　出席三名
・七月二十四日　深島・屋形島探訪　参加者　二十八名
・八月八日　佐伯地区文化財調査委員会連絡協議会　蒲江町
・八月二十四日　倉橋町史編纂委員案内　米水津・蒲江　四名